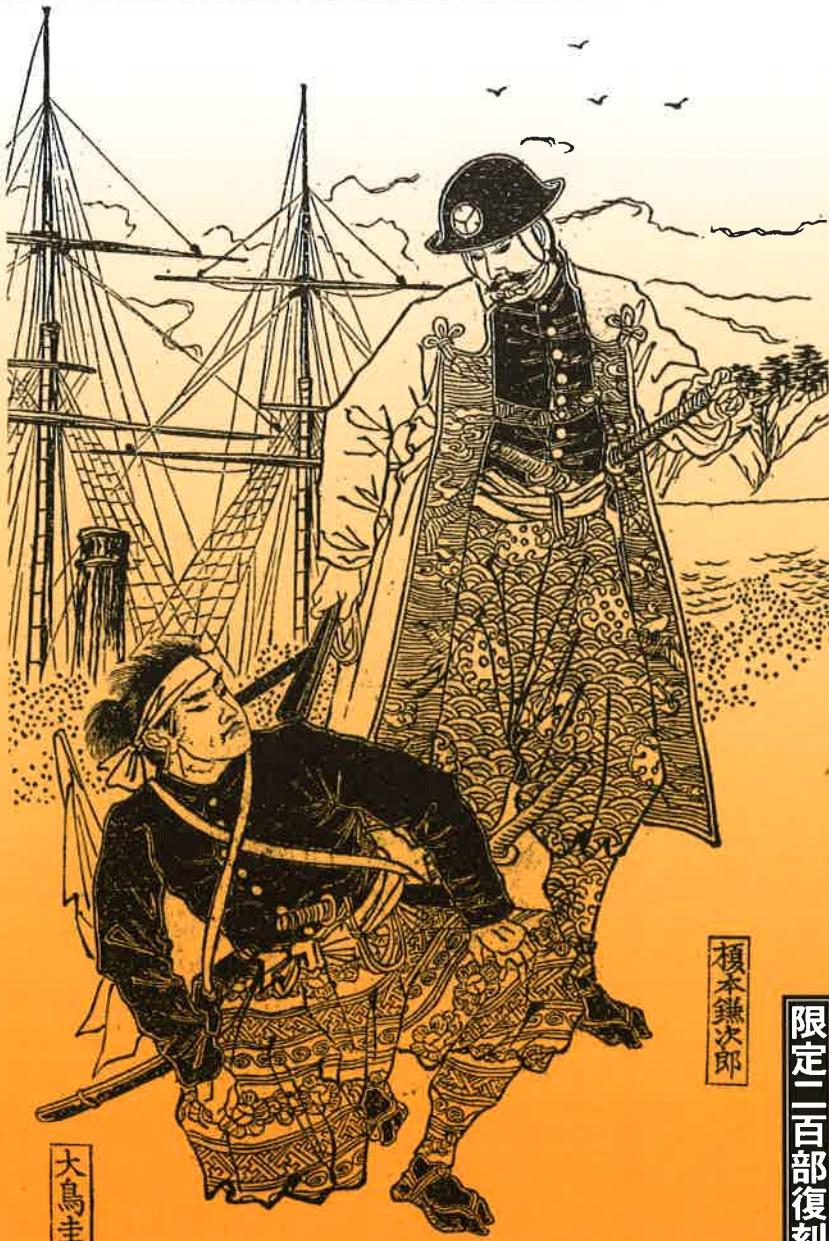


# 近世紀聞全部



榎本鎌次郎

限定二百部復刻

大島圭介

黒船到来から

西南戦争まで

史実、巷説、風説の

すべてを取り込み

見応えある

百二十枚もの

挿絵で魅せる奇書

海舟勝安芳君題辭  
條野有人先生序  
染崎延房先生編輯

  
マツノ書店

略目次

第一編

巫船初めて浦賀へ着する事  
亜国の書簡を和訳し各藩に示さるる事  
墨使再び来船及び各国通商を請ふ事  
朝議殿にして幕吏鎖開の間に困む事  
五カ国互市の条約を結ぶ事  
桜田の上巳に紅雪を降す事

第二編

浪徒蜂起して薩長大に周旋ある事  
永井が入説調わず遂に勅使東下する事  
島田臯首並関東大変革の事  
列藩次第に入洛して京師繁栄の話  
尊攘決議して鴨男山へ行幸の事  
長海に五回外国船を砲撃する事

第三編

薩海戦争及び大樹東下の事  
一橋殿問答及び洛中動揺の事  
朝議一変して七卿長門へ下向の事  
県令を誅して浪士等五条に抛る事  
山嶽に立籠りて天誅組四藩と戦う事

第四編

南山の義拳鎮静する事  
平野憤激して沢脚を誘ふ事  
生野銀山に義党等屯集する事  
但州鎮静及び長の両士入洛を請ふ事

將軍家上洛 宸翰を賜る事  
筑波太平の両山に有志ら屯集の事  
第五編

波山の義徒威を近傍に示す事  
慷慨の士池田屋に憤死の事  
兵器を携て有志、嵯峨山崎に抛る事  
一橋殿深慮屢々長藩士を説諭する事  
憤懣に堪えずして長藩士禁闕に迫る事  
蛤御門に来島等接戦する事

第六編

鷹司邸に長兵官軍と戦う事  
深草の陣営に大垣藩長兵を支える事  
京乱鎮静に至り、外艦再び長州を襲う事  
武田耕雲斎等水戸城下にて姦党に遮らる  
水戸城外に武田等募兵に抗する事  
姦党幕吏と議りて大炊頭を賺す事

第七編

勢い窮まりて武田等加州の軍門に降る事  
長州追討及び高杉胆略の事  
幕吏に接して備後介国情を弁ずる事  
募兵芸地に進みて長防騷擾する事  
防長の士民憤激して台命に服せざる事  
遊撃隊進んで久野坂を取切る事

第八編

長人東軍を逐うて石州を略取する事  
芸豊二洲の戦争及び薩侯建白等の事  
大樹薨去して西征の師をゆるめる事  
徳川氏政権を奉還して紛論頻りに起る事

廷議一定して内府を京師に召さる、事  
鳥羽伏見両道に官兵屢々東軍と戦う事  
第九編

関東を征せんと官軍両道より進む  
総野の間に脱兵官軍に抗す事  
脱走の激徒等各所に官軍に抗する事  
彰義隊の名称初めて起るの話  
激徒等事を誤つて官軍東台を囲む  
死を軽んじて彰義隊等屢々防戦す

第十編

東台の激徒鎮定の後徳川家へ封土を賜う  
官軍進んで奥羽各所に激戦する事  
官軍斥力平の城を襲はんとする事  
激徒等長岡にて官兵に抗ふ事  
奥羽越戦争及び三好清房の事  
官軍奮励若松の城下に迫る事

第十一編

聖断寛仁会津等の罪をゆるうす事  
東北一時平定し又蝦夷地に暴徒起る  
脱士等水陸より進んで福山城を落す事  
開陽艦破壊ついで暴徒等館村の砦に迫る  
館村落居及び三上超順の小伝  
脱兎等一時蝦夷地を畧定す

第十二編

官軍蝦夷地を再襲の事  
数度の激戦脱士等決死官軍を防ぐ事  
両軍数回海陸に激戦する事  
仁血雨露の如く及ばし衆威万歳を謡う

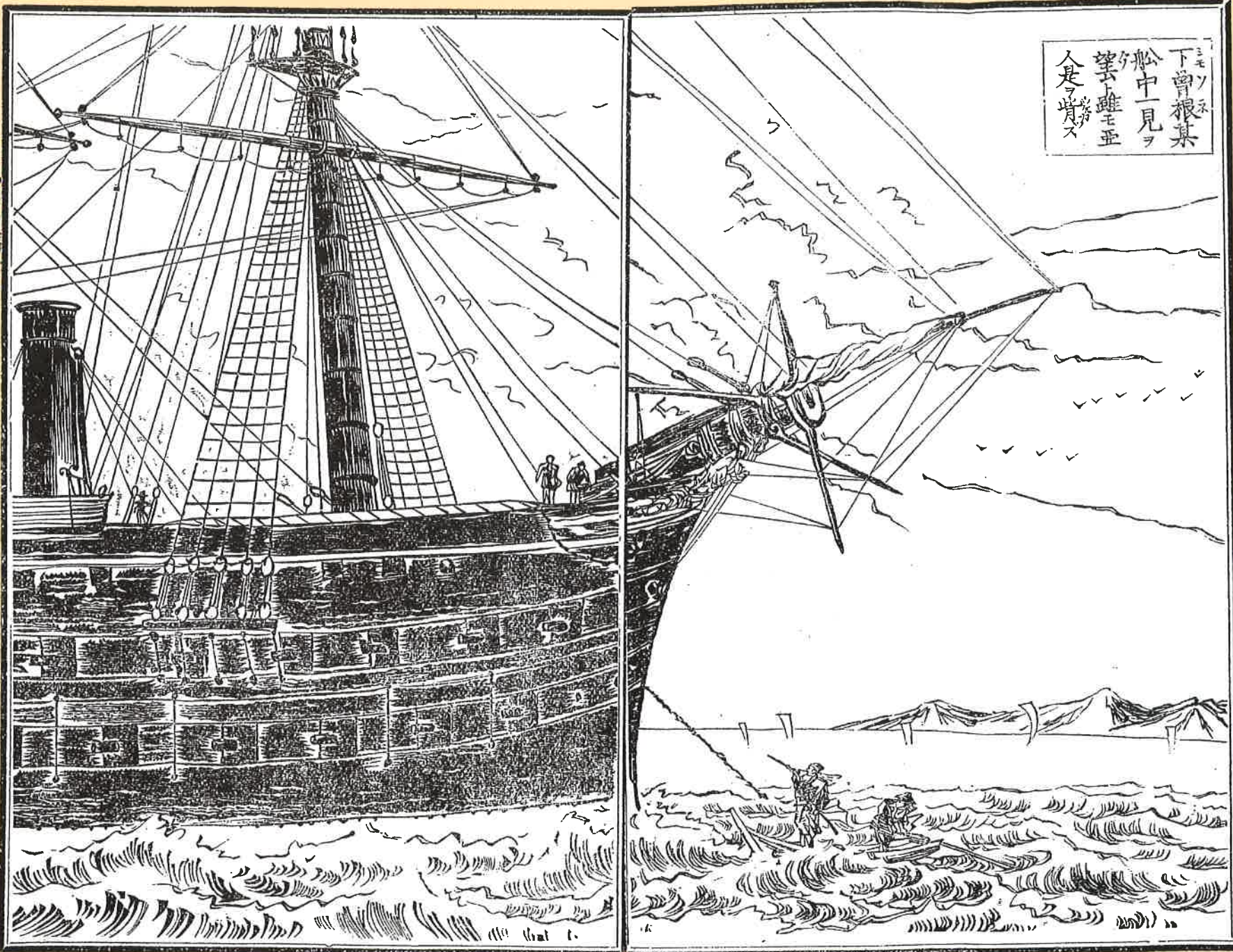
▼近世日本の動きを講  
談調の名文と迫力満点  
の挿絵で伝え、何度で  
も繰り返し、飽きずに  
読ませる無類の珍本。  
▼しかも今回はわずか  
二百部「先作り」で、  
すでに印刷を終え、製  
本中です。  
売り切れの節は、ど  
うかご容赦願います。

■体 裁 箱入上製本  
A5判八六〇頁  
■定 価 一万八千円  
(税・送料別)  
■特 価 一万五千円  
(税・送料別)  
※特価期限 二八年七月十日

■二百部限定 (番号入)  
▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK  
山口県南門市銀座2-1-13  
マツノ書店  
TEL 083-222-2955  
URL <http://www.matsuno.com>

今回の復刻に際して  
B6判の原本をA5判に拡大し  
挿絵も文字も、まるで  
別の本のように生き返りました

内容見本  
(原寸大)



下曾根某  
船中一見ヲ  
禁上雖王亞  
人是ヲ背ス

々の雑談に交り中嶋香山問ていへらく御邊等本國を去て万里の波濤を渉り支那琉球にも投  
錨せらるゝの由されバ何れの娼門にか憩ひて勞心を慰られしぞ亞人のいはく我輩國王の  
書を日本に達せん事をのみ思ひて夫等に懸念せず事成ての歸帆には必ず咬吻巴に遊ばん復  
足下等の如何香山のいはく我輩も志じ御邊等と同じ事件果て後江府に歸り宜く鬱を散せ  
ん亞人首を左右に振り然らず此濠にも娼妓ありと聞く何ぞ歸府を待給はんやと云り此一言  
を聞て香山早くも日本の地理を知れりどて心中恐怖の思ひあり話説果て四士異船を辭した  
るの夜八字頃あり同五日午後二字頃御小性組番頭大岡豊後守組下曾根金三郎とて當三月  
浦賀御備場へ砲術教授として勤仕せし教頭なりしが手の者四五輩を卒し異船近くへ乗寄  
せ船中を見物せんとて種々手眞似を以て乗船を請と雖も亞人曾て許さず疾其隙に船中にて  
は寫眞鏡を出し下曾根及び其餘の人跡を寫し取しが下曾根ハ粧ひ異風にして帶劔花美を盡  
し衆に勝れて目立しと歎翌六日ハ閣老牧野備州侯より奉書を以て異船萬一内海へ乗入るの  
時ハ芝品川最寄に邸これあるの面々固あるべくとの達し出しが其夜八字頃布衣以上の有司  
俄に登城ありて皆曉方の退出なり开が中に浦賀奉行井戸鉄太郎ハ石見守と叙爵ありて即刻

# 物語から歴史学への途中

西澤 朱実 (幕末維新史研究者)

きっかけは一枚の挿絵だった。

もう二十年以上前、「秀頼会」という伊庭八郎の研究会を主宰していた時に、伊庭を描いた挿絵が欲しい一心で本書を購入した記憶がある。

今でこそ箱館まで戦った旧幕軍の隻腕の剣士として知られる伊庭だが、当時は土方歳三の昔の遊び仲間役で時代小説に登場すればいい方だった。もともと明治初期の人気は逆で、箱根湯本戦での伊庭の勇姿は月岡芳年が錦絵に描いたほどである。正直なところ、二十年前の私はこの錦絵が欲しかった。が、何しろ出物がない(あっても高そう)。結果、刊本で比較的人手しやすい『近世紀聞』の挿絵に落ち着いた次第である。

かくしてとりあえず伊庭のビジュアルを確保した満足感の下、肝心な本書は一部を斜め読みしたまま「積ん読」の仲間入りをし、本棚の隅で長い眠りについたのだった。

そもそも絵入りの史書など考えられず、編著者の染崎延房が二代目為永春水を称した人物とくれば、中身は「忠臣蔵」よろしく虚実ないませの「歴史モノ」が想像される。まあいいか：となったのも無理からぬことと思う。

が、このパンフレットのために改めて読み直してみても、以前の先入観は軽く裏切られた。読み物ながら「通史」として意外によくまとまった内容は、今日、専門的な各論研究に親しんだ読者にはむしろ新鮮に映るのではないだろうか。

『近世紀聞』は明治七年から十四年にかけて、十二編三十六巻の冊子本として刊行された。出版元は金松堂、初編を条野伝平(採菊散人)、二編以降は染崎延房が担当し、黒船来航から箱館戦争終結に至る変革の過程を詳かに、その後の西南戦争までを簡略にまとめている。条野は鍋木清方の父で人情本作家として知られ、のちに「東京日日新聞」を興す人物。染崎は対馬藩士ながら初代春水に師事し、勤めの傍ら安政二年に発表したお家騒動物でブレイクした。かの坪内逍遙も染崎作品の愛読者だったという。

この幕末の戯作者二人が本書で目指したのは、フィクションではない歴史、事実のみによって記される時間だった。いわく「原これ一家の野史なれど、亦小説の属にあらで」、「見聞の俣を普く記」し、「遂に今日の治世に至りし事迹を識しめんとする」ものである(初編・八編序)――。

今日ではあたりまえのスタンスだが、近代以前、庶民にとっての「歴史」が、軍記物語や講談のように伝承過程で虚実が入り交じる「物語」だったことを考えれば、戯作者たちの方向転換を体現する『近世紀聞』は、「史実」がフィクションと訣別し、科学としての「歴史学」へ向かう転機

の一つに数えてよいかもしれない。その背景には、実学尊重の時代的風潮や、教部省が国民教化の方針を定めた「三条の教憲」への追従があったとされる。本書の場合、記述の対象が遠い過去ではなく、つい最近編者と読者が生きたごまかしのきかない時間だった点も、編集方針に大きく影響したようである。

かくして「彼是の雑史を参考」(染崎)に、本書は幕末維新史のトピックスを細大漏らさず採録しようと試みる。特徴的なのは、単に出来事の列挙・解説で終わらず、それらが集束する「幕末」を、読者の「今」に繋がる時間の連鎖の中に再現しようとしていることだろうか。

たとえば文久三年なら、将軍上洛から生野の乱までの間に、鎖港談判・中根一之丞殺害も含めて百科事典並みに出来事がひしめき、元治元年には天狗党筑波拳兵と禁門の変が相互の垣根を超えて時系列に配されることで、各事象が出来る必然性・関連性を明らかにしつつ、これらが同時進行した当時の混乱と、明治へ向かう時代の胎動がよりリアルに醸し出されている。また毛利敬親の軍令状・一橋慶喜と中川宮の問答といった史料が所々に挿入され、知的好奇心をくすぐる仕掛けも充分。天変地異や世直し一揆、今日では見落とされがちな青松葉事件にも及ぶ筆からは、編者の覚悟と貪欲さが窺える。

むろん、慶応以降の政治的事象は追跡が甘く、薩長同盟でさえ影が薄いという瑕疵はある。また巷説・通説まで網羅した結果、岩亀樓の亀遊が登場し、治療中の吉村寅太郎が関羽に喩えられるような物語性・通俗性も残ってしまった。本書が「明治開化期文学集」(筑摩書房)や「新日本古典文学大系」(岩波書店)に抄録され、「文学」作品として扱われてきた所以もそのあたりにあるのかもしれないが、当時の史料の限界や編者のキャリアを考えれば充分な健闘であり、その歴史学への志向は評価されるべきだろう。

ところで、『近世紀聞』は初版の冊子本のほか、各編ごとの合巻や全巻合本、大正十五年の組み替え復刻版(春陽堂)など、再版の種類が多かった。この読者ニーズの高さは特筆しておきたい。

ちなみに今回の復刻は、金松堂の全巻合本版とのこと。冊子本から一部の挿絵と序文が割愛されているものの、現在古書市場に並ぶ春陽堂版に比べ、より初版の雰囲気伝わりやすいと思われる。長く「通俗な実録文学」という評価を受けてきた本書だが、これを機に、歴史と文学のはざまでやや歴史寄りにツメを立てる、硬派な一面にも光が当たることを期待したい。

るの時高杉をも俱に捕へて禁獄なさんと圖りしを高杉備りに身を脱れて筑前の國に走り野村望東の許に到り始く危難を避ん事を請ふに此望東と喚るは福岡の藩士たる野村貞貫の妻にして初めの名を阿元と言ひしが夫貞貫没して後産誕して尼となり名を望東と稱じつゝ折々京師に登り杯して専ら和歌を善せしが當今幕府威權を擯にし天下將に亂れんとせるを女ながらも望東は慨歎する事尠からず頻りに王室の陵替を痛みて有志の武夫等と交りて結び恢復の議を論じなどする頗る女傑あるをもて高杉とも相識る中ゆへ更に一議に及ぶべくもわらず終に其身の別室に匿ひ百方これを回護せし故稍危きを免るゝに至れり然るに俗黨三國老及び禁獄の藩士十二名の首級を欲て幕吏に渡せし其赴きを傳へて高杉憤怒に堪やらず俗黨を斥けてもて恢復を圖らんと遂に望東の家を辭し去り直ちに赤間が關に版りて猛可に横文を四方に傳へ頻りに兵を募るにぞ彼の奇兵隊を始めてして其他有志の面々の各所に潜伏なしたるが此横文の傳へるを聞き忽ち爰に走集まるもの五百餘人に及びしり高杉乃ち太田市之進山縣狂介等と謀り赤間が關の藩廳を不意に襲ふてこれを奪取し彈藥兵器の類ひを奪ひ或は土地の豪富に説て軍資の爲に若干の金米を納めしめ兵備大いに整ふを

もて懸て諸隊を引率し將に萩城に逼らんとするに俗黨甚だ敢て即ち激徒蜂起せしたる事の大第を幕府に訴へ藩主父子を城中に擯し退討の令を藩内に下し市民に衣食其餘の物をも諸隊に賣る事を禁せしめ既にして兵を出し國老栗屋某を將とし諸隊を追撃せしむれば高杉等これを遂へて烈戦に及ぶ程に何れも憤憤憤憤の鋒先最も尖れば栗屋の一隊大いに敗れて面を向くる事を得ず之に因て俗黨の尙も諸隊を練出して連討三日に及ぶ迄虚聞なく砲戦をたりしと遂に俗軍利を失ひ引て萩城に籠籠るを高杉等ハ勝に乗じて齊しく城門に攻詰たり此時間居る者ありて或之を和解すあり是に於て高杉等俗黨の首謀數名を刑し之を軍門に討して一藩の禍根を定むるにぞ藩論終に一致せしり高杉等ハ又藩主父子を防州山口に遷したり始め此藩攘夷の年大いに築堡を山口に築き藩主これに居住せしが京師の變動ありて後俗黨藩主を萩城下ある寺院に始く置くを又山口へ移せしなり斯かちて高杉等の諸士を集めく相議するやう幕府の我藩を罪するや只國老以下甲乙を殺したるのみにして止むべしと察はれず且つ我が輩の舉動を聴てい必ず再び兵を發して之を征せんと謀るからん倘然んには我等諸君と俱之を防ぎ死者の靈魂を慰むべし兄弟等宜しく努力せ



五百十一



内容見本

どよ舌戦のみにて事は遂に義黨の方よりして砲撃に及びしに手薄なれども陣屋方にも聊か防禦の備ありて迭に奮戦す折うら有馬家の援兵の時分をはり横合より小銃數發放ち蒐れバ退が強氣の浪徒等も前後に敵を引受てい又奈何とも詮術なくつひに柵木の宿内へ五六箇所火を放ちしに折うら大風吹おこりしりバさしも豪商軒を並べて邸にハ稀なる街ありしも驛中一時に猛火となり餘餘陣屋に吹つけられバ戸田家の藩士等あどろきて火を防ぐんとせざるも煙りにまぎれ浪士の輩ハ咸小山へと退きける翻程に田丸等の柵木の金策事調ハぬと自餘の豪富を募りつゝ若干金を出させたれば軍資に事を缺くよしもなく殊さら兵器も遺所彼所にて既に準備の整ひたれば此うへハ筑波にいたり同盟殘らず會合して近きに事を舉ぐべしとやがて筑波に登山せり此山にハかねてより同士の群の隊長たる山田一郎を頭目として五六十名精籠り専ら近郷近在の豪農を説諭して大いに金米を積たくハ且有志をも招きしりバ新入の浪士もすくならず然るどころハ大平より總勢のこちす登山せしゆへその人數許多く本坊はじゆ山内へ更に旅宿をさだめつゝものハ門に幕打どせし宿割凡そ左のごとし(這ハ其の頃の開書を寫せしなれば或ハハ姓名の知れざるもありと知る

(ハ)

幕の紋	田丸稻之右衛門	本坊止宿
川崎忠兵衛	石濱屋止宿	
竹内百太郎	古通寺止宿	
藤田小四郎	寶塔院止宿	
上下百二十人	大越屋止宿	
上下五十餘人		
名前不知者		
上下六十餘人		
名前不知者		
上下詳からず		
千種太郎		
上下二十餘人		